

初公開の会津八一宛

片上伸・天弦書簡

金子 善八郎

一、

このほど、木村秋雨資料の中に片上伸・天弦の会津八一宛書簡があることが分かった。

書簡は明治四十一年（一九〇八）十月二十一日付で、東京牛込の佐々木方から、新潟県中頸城郡針村 会津八一に宛てたものである。

片上伸・天弦は明治十七年生まれ、愛媛県の出身。御風や八一などと早稲田大学の同期卒。卒業と同時に御風と共に第二期早稲田文学の編集部、早稲田文学社に入った。書簡はこの時代のものである。

針村の有恒学舎に赴任した八一は、早くから関心を持っていた一茶の信州柏原を訪れ「一茶を吊い」翌年、「一茶六番日記」を発見、その原稿を東京の出版社から出版するため俳人の高浜虚子に送り、友人の片上伸・天弦にもその旨を頼んだ。この書簡は、その返信が遅くなったことを詫げるものである。

「今晚虚子が国民社から帰るのを待受け久し振りて会つて話をした」。その結果、俳画堂からの出版は「多分」大丈夫で、俳画堂がだめでも、他の「本屋」から出せるので、次の二点を聞きたいのだと。

(一) 一茶の日記は原稿用紙にして何枚位になるのか。

(二) 出版したい本の紙質、表紙の装飾、版型体裁などは。

以上、至急知らせてほしい。その上で虚子から本屋へ話をしてもらう。話は成立するものと信じている、と。

二、

この書簡に関係する三人、片上伸・天弦、会津八一、そして相馬御風は、相互に友人関係にあった。

御風と伸の関係。伸は大正四年（一九一五）、ロシアへ留学し、その一年後、御風は糸魚川へ帰住する。

八一と御風とのことはよく知られているが、友人、伊達俊光宛、八一書簡『会津八一書簡集』植田重雄、平成三・一・十五・恒文社）によっても二人の関係を知らることができる。

明治四十年七月四日付には「相馬は先月糸魚川へ帰へりしよし、先日、高田まで腕車にてあひに行きしも、あふことを得ず。帰郷の途次には必ず立ちよるべしの約束あり。ひそかに之をまち居れり」とある。

三、

「六番日記」は研究史上の大発見である。

それには、従来知られていない句、未発表の句が二千五、六百もあり、それによって、一茶の句が、一挙に倍加するという。

そのため八一は、この「日記」の校訂に専心し、「一茶俳句集の最も完璧なるものを編し、後世に伝へ度」と考え、この「原稿」を「虚子に托した」のだという。

伝記『秋艸道人、会津八一の生涯』植田重雄、昭和六三・恒文社）には「板倉村の宮下某が、出版して金儲けをやるのだらうと侮辱の言を吐いたため、道人は激怒し」とあり、出版の取り止めは、八一の側にあったようになっていたが、出版社の側にも何らかの理由があったものと考えられる。

結局、この日記は、出版されなかった。

四、

この二年後、八一は有恒学舎を辞して上京、早稲田中学校の教師になる。そして、「着任、まもなく早稲田大学の文学会で、一茶についての講演をおこない、恩師坪内逍遙はじめ抱月、その他の人人に感銘を与え、恩遇にむくい、面目をほどこした」という。

そして、この発表を機に一茶研究の論文が御風の意向によって「早稲田文学」に載ることになる。

日前は貴書正に拝承 一茶論のうち略伝の部本月中脱稿の御目かけ可申候 紙数は先づ二十枚位と御承知おき被下度候 委略はあとよりなほ
turgenev 貴訳は正に落

手のよし 先日伊達氏よりたより有之候 令聞へよろしく

(八一、御風宛書簡、明治四三・十一・二六) 御風の問い合わせに対する八一の返信である。

五、

八一の「俳人一茶の生涯」は、「一茶を観る世間の人の眼は久しく間違つて居ました」。から始まる。

そして、「一茶観の差異」、諸説は、一茶の「史伝」が世に知られていないことと、「句集の読み方」の違いによる。

柏原に帰った晩年の一茶は、「並々ならぬ意地悪き運命に囚はれて其玩具となった」ように見える、と。

また、一茶を「俗塵を離脱した仙人」とみるのは「誤解」であり、「滑稽の句」があるからといって「滑稽家」というのも「浅薄」で「一茶の大詩人たる真面目の別に蔽として存すると認識」しなければならぬという。

六、

論文は、四百字詰、二十四枚。文章は、「です」「ます」の敬体で分かり易い。

当時としては出色の一茶論で、会津八一の名が、この論文によって中央で知られることになった。そして、この論文の「出版」は、それを保証するものであったと考えられる。

今回公開された片上伸・天弦の八一宛書簡は、今までよく分からなかった出版事情を明らかにするもので、貴重な資料である。